

長期的な取り組み — 縦断研究のコツ

縦断研究は、やってみたい（やらなければならない）けれどもハードルの高い手法の一つではないでしょうか。今回は、胎児期から高齢期までのさまざまな研究について、対象者との関係作りやデータ取得の工夫を含めてご紹介いただきました。（大神優子）

発達や子育てに伴走すること

湘北短期大学保育学科 准教授
岡本依子（おかもと よりこ）

Profile — 岡本依子

1998年、東京都立大学人文科学研究科博士課程単位取得満期退学。東京都立大学人文学部助手を経て、2002年より湘北短期大学。専門は発達心理学（コミュニケーション発達、地域子育て）。著書は『エピソードで学ぶ乳幼児の発達心理学』『親と子の発達心理学』（いずれも共著、新曜社）など。



5年ぶりに会ったTくんは、私の身長を楽々追い越し、声変わった声で、「あ、こんにちは」と、首だけをちょっと前に突き出して、あいさつをしてくれました。無愛想になる年頃。私は、そんな様子が嬉しくて、でもうまく言葉にできず、「大きくなったね〜！」を何度も繰り返していました。

私は、Tくんがお腹にいたときから小学1年生まで、おうちを訪問して調査をさせていただいていました。定期的な調査が終わってからもお母さまとはときどきやりとりをしていたので、この久しぶりの再会がなかったのです。

縦断研究は、協力家庭と連絡を取り合う癖がつくせいか、調査期間が終わってからも、何かきっかけがあると、大きくなった子どもたちやお母さまたちに再会できることがあり、そのときの感慨深さといったら！ 私としてはぜひお勧めしたい研究法です。

縦断研究を計画する

私は親子のコミュニケーション発達に興味があり、妊娠期から就学時までの縦断研究に携わってきました。漠然とした縦断研究への

あこがれがあったのですが、親の育児感情を研究している菅野幸恵さん（青山学院短期大学）と話しているうちに勢いがつき、さらに、指導教官の須田治先生（首都大学東京）の後押しのおかげで数名の学生（当時）を巻き込んで、「かんがるうプロジェクト」がスタートしました。

縦断研究の計画を立てるとき、まず決めることが、(1) ケース数、(2) 調査の頻度（間隔）、そして(3) 調査期間です。ケース数が多く、調査の頻度が高く、さらに、調査期間も長ければ、研究としては安心かもしれませんが、研究者にとっても協力者にとっても無理をしながらの引くに引けずの状態になるかもしれません。調査期間中に、研究者自身の生活や仕事量の変化、さらに、病気などの予想外の出来事で、同じペースでの縦断調査が維持できなくなることもあります。協力者も、職場復帰や次子の出産や引っ越しがあったり、幼稚園の役員を引き受けたりなど、生活の変化に伴い、調査が徐々に負担になってくるかもしれません。

ケース数に関しては、協力者の引っ越しなど中断ケースを見込んで少し多めに考えていいかもしれませんが、それ以外については、研究の目的に即した無理のない計画のほうが、協力者・研究者ともに心地よく調査ができ、データの質を確保しながら、結局は長続きます。

とはいえ、調査を始める前ですから、計画を立てるにも見通しのつかないことも多くあります。そこで、ひとつお勧めしたいのが、共同研究です。私自身、縦断調査が進行しているなか、第二子の妊娠、出産がありました。しかも、妊娠の経過が悪く、調査に行けるような状態ではありませんでした。そのとき、共同研究者が交代で、私が担当する家庭を訪問してくれたのです。共同研究者には迷惑をかけましたが、補い合うことができる共同研究の強みも感じました。

協力者の募集

私たちのプロジェクトでは、妊娠期のうちに協力者を募りたいと考え、妊婦さんが集まる妊産婦教室（プレママ教室、パパママ教室



図1 協力者募集のためのパネルの例

など名称はいろいろです)で募集をさせていただきました。

募集に際して、調査協力依頼状などひと通りの書類をそろえたものの、初めての出産を控え、子育てのイメージがまだない妊婦さんに研究について理解してもらえらるだろうかという心配がありました。そこで、図1のような写真付きのパネルを使って、どのような調査をするのかについて説明しました。

出産を心待ちにしつつも、初めての子育てに不安もある妊婦さんたちは、興味深そうにパネルを眺めていました。「このくらいの年齢でこんなふう遊ぶようになるのね」というイメージを持っただけでなく、「研究といっても子どもと普通に遊ばばいいのね」と理解していただけたようでした。

また、このプロジェクトは結果的に長期の縦断研究となったのですが、募集したときには、「ひとまず、お子さんが2歳になるまで」の研究として依頼しました。ただし、「2歳になったときに、調査の延長をお願いするかもしれません」とも付け加えました。そして、2歳になったときに、改めて調査協力依頼を行い、承諾を得られたご家庭は5歳まで延長しました。5歳でいったん終了した

のですが、就学後にまたまた1回だけの調査を依頼して、承諾いただけたご家庭を訪問することができました。

このように期間を区切って協力依頼をしたことで、協力者はずっと先まで見通さなくても、目先2年ほどを考えればいいので、はじめから5歳までと依頼するより承諾が得られやすかったと思います。また、私たち研究者側も、何年も先のことなど見えない状態でしたので、「延長をお願いするかもしれないが、ひとまず2年」という依頼はよかったと思います。

縦断研究での関係づくり

協力者との関係づくりは、私たちがいちばん意識してきたことかもしれませんが、意識してきたわりに、こうすればよい関係が築ける!というような魔法の法則は見つけられませんでした。

笑顔で接する、否定したり評価したりしない、母親役割を押しつけないためお母さまのことは名前と呼ぶ、研究者としてではなく「子育てのなかま」あるいは「後輩」として見てもらえるよう何度もそれを言葉で伝えるなど、共同研究者と話し合いながら試行錯誤してきました。

縦断的なフィードバック

私たちのプロジェクトでは、分

析結果のフィードバックも縦断的に行っていました。「かんがるう親睦会」という対面での報告と、「かんがるう通信」という紙面での報告です。親睦会はできるだけ参加しやすいように、通信はできるだけ読んでいただけるように、工夫をしながら、年に1回以上のペースで行っていました。親睦会での親視点ならではの感想がヒントとなって、再分析を経ておもしろい結果を得たこともあります。

フィードバックを定期的に行うことで、徐々に、協力者に研究への興味を持っていただけるようになったのではないかと思います。普段の調査で家庭訪問をするときも、お母さま方の調査に対する態度が徐々に変わってきました。初めの頃は頼まれたから協力するという受け身の「協力」だったのが、興味を持って能動的に研究に「参加」するという姿勢へと変化したように感じています。

「伴走」という視点

私は、このような協力者の参加への変化を感じたことで、協力者からみた研究者とはなんだろうと考えるようになりました。

子どもの発達の变化に目をこらし、子育ての話に耳を傾け、その協力者の発達や子育てを追体験するのが私たちの仕事のように感じています。たぶん、私たちは子育ての「伴走者」として、時間軸を共有し、隣でともに走る人です。そして、伴走を支えているのは、発達を見逃したくない、見逃してはもったいないという気持ちかもしれません。

あら、もう紙幅がありません。私たちのプロジェクトの裏話を含めた詳細は、『親と子の発達心理学：縦断研究法のエッセンス』（新曜社）をご参照いただければ幸いです。